

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12343

研究課題名（和文）現代ドイツ語圏文学における事実と虚構 A.シュミットとC.J.ゼッツを比較して

研究課題名（英文）Fact and Fiction in contemporary German literature

研究代表者

犬飼 彩乃（Inukai, Ayano）

東京都立大学・人文科学研究科・助教

研究者番号：70622455

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、戦後西ドイツの言語実験者アルノ・シュミット（1914-1979）と、今世紀に活躍するオーストリアの作家クレメンス・J・ゼッツ（1985-）の初作品を事実と虚構の観点から比較分析した。

シュミットについては、ドイツで初期作品の日本語への翻訳における諸問題をドイツのウルム市で学会発表し、どの文体について論文を発表した。ゼッツについては小説『インディゴ』を翻訳公刊、彼の小説・エッセイ・講演について論文を複数発表し、その実験姿勢やポストモダンズムとの関係について学会発表をした。またゼッツ研究にかかわる研究者を招待し、シンポジウムを一度、作家本人を交えた国際ワークショップを一度開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後の西ドイツ文学で文壇に大きな影響を与えたアルノ・シュミットと今世紀の言語実験に意欲的なオーストリア作家クレメンス・ゼッツという、その重要性にもかかわらず日本ではほとんど言及されてこなかった作家たちの研究成果を発表することができた。2021年にゼッツがビューヒナー賞を受賞し、ドイツ語圏でもクレメンス・ゼッツ研究が大きく進展しつつある。それに先駆けて日本で研究を推進できたことは学術的に大きな意義がある。

加えて、ゼッツ作品の日本語への初の翻訳である小説『インディゴ』が刊行できたことは、ドイツ語圏のあたらしい文学潮流の一つを日本国内にも示した点において、社会的意義も果たした。

研究成果の概要（英文）：This Project compared two German novelists, Arno Schmidt (1914-1979) and Clemens J. Setz (1985-) under the theme of fact and fiction in German literature.

I have published research results on early novels of Arno Schmidt, novels and essays of Clemens J. Setz. I published also the first translation of Clemens J. Setz, "Indigo" (Kokushokankokai Inc.). For this translation and the other works of C. J. Setz I also held a symposium with researchers in Japan in 2019, and an international workshop with the author Clemens J. Setz on the theme of posthumanism. For Schmidt I had a presentation in Germany about the Japanese translation of his works.

研究分野：ドイツ語圏文学

キーワード：ドイツ語圏文学 オーストリア文学 戦後文学 デジタル文学 ポスト真実 ヴァーチャル リアリズム
ポストモダン

1. 研究開始当初の背景

本研究計画は、欧米で広く流行し、ドイツ語圏でも 2010 年台初頭に特に多く制作された、主人公がその作家と酷似した作品群、オートフィクションを考察の出発点とした。なかでも事実と虚構が入り乱れる本ジャンルの特徴を活かしてテキストの虚実の関係性、作家・テキスト・読者の関係性を創作により問い直し、文学の中心的問題に切り込もうとする作品群に注目した。ドイツ語圏から該当する時代の異なる二作家を抽出し、その文体や作品分析から両作家がどのように事実と虚構の関係を捉えているのを明らかにしようとした。

事実と虚構の問題については、古くはギリシャのミメシス論まで遡ることができる。目の前の現実のように思われるものをいかに認識し、理解・整理してどのように作品へと投影するかは、今日にいたるまで常に芸術家たちの主要な課題の一つであり続けてきた。特に近年では、「現実」の捉え方が大きく変わってきている。移民流入やマス・メディアの衰退、インターネットや個人個人のニーズに対応する各種技術・サービスの隆盛によって、現在では語りの前提として機能すべき共通の認識基盤がなくなりつつあり、興味が細分化された読者へと強くアピールするテキストの成立が難しくなった結果、強烈な印象を与える「わたし」が登場する機会が増加した。また「ポスト真実」という流行語が表すように、ヴァーチャルリアリティ技術やフェイクニュースなど、虚実をまじえた「現実」があふれかえる現代社会では、当然ながら 19 世紀リアリズムのような理解での確固とした「現実」をとらえ、それをテキストに反映させる、といった単純な世界観のテキストは成立しなくなって久しく、20 世紀モダニズムで「内的現実」として個人化して追求された「現実」は、ポスト構造主義でロラン・バルトらによって完全に相対化され否定される。ところが同様に「作者の死」としてバルトに否定されたはずの作家のテキスト解釈への影響力は、このオートフィクションの流行にもみられるとおり再び大きくなってきた。

本研究では、19 世紀リアリズムに影響を受けモダニズムからポストモダニズムへの過渡期に活躍したアルノ・シュミットと、ポストモダニズムから影響を受け現代に新しい文学を創造しようとするクレメンス・J・ゼッツのテキストを分析することで、現代における事実と虚構の関連や、その変遷の一端を解明しようとした。

2. 研究の目的

主人公として作家本人と似た人物が登場する、という形で事実と虚構をあえて錯綜させるオートフィクションの先行研究では、まだ本計画で研究対象とされるアルノ・シュミットやクレメンス・ゼッツへの言及はほとんど見られない。しかし両者は事実の描写に加えて空想、思索、文学論などを重ね合わせ多層的なテキストを構成していることから、事実と虚構の関係性について大変意識的な作家といえる。両作家のテキスト分析を通じて、以下の 3 点の解明を主な目的とした。

文学作品、主に散文において、両作家が考える事実と虚構の特徴や問題点を洗い出す。

創作のための理論的裏付けとしての、両作家の文学論、認識論を整理する。

各時代や文化的背景との関連を紐解き、19 世紀ドイツリアリズムからモダニズムからポストモダニズムへの過渡期(シュミット)と、ポストモダニズムから現代(クレメンス・J・ゼッツ)にかけてのドイツ語圏における事実と虚構の流れを追う。

3. 研究の方法

両作家のテキスト比較は、M.Wagner-Egelhaaf (2013) から先行するオートフィクション研究の分析方法を参考に、以下の点について行った。

エッセイ、インタビュー、講演における両作家にとっての「事実」と「虚構」

ゼッツはオートフィクションのほか、AI、ゲーム、ヴァーチャルリアリティについてもインタビューやエッセイが確認できる。シュミットはエッセイで自身を「極端なリアリスト」としながらも、認める事実の範囲は極度に狭く、繰り返しリアリズムに関する考察を行った。

言語表現の写実性

両作家とも内容だけでなく言語表現にも事実を投影させようとする。ゼッツは新技術によって広がる世界に注目し、使われ始めたばかりの言葉や現象は存在してもまだ対応する語彙がないものに興味を示し、新しい表現をそこへあてようとする。シュミットは音声と表記の不一致に注目し、正書法の独自解釈や日常使われている口語的表現の追求などに力を入れた。両者が認識する事実と言語のずれと、ずれを修復するための新語の創造方法に注目した。

テキストの事実と虚構

シュミットは、眼前の事実を細々と書き記したことで、現地住民が非常に困惑したという現代のオートフィクションの抱える個人情報保護の問題をすでに抱えていた。またゼッツの『インディゴ』も詳細かつ具体的に実在の固有名詞を使用して作品を作っている。同時に小説として成立させるために虚構も混ざっているため、事実から虚構へと移った瞬間には何が起きているか、該当箇所を細かく読み解く。

テキスト内に登場する作家と似た登場人物の扱われ方について

を踏まえ、テキスト内に自分自身を投影させることについて、その効果と作家の意図を分析

した。

翻訳作業を通じたテキスト分析

ドイツ語のテキストを日本語へ移す作業の中で、単純に意味を移管できない多層的テキストを抽出・収集することで両作家の文体の特徴と創作の意図を分析調査した。

4. 研究成果

本研究期間では、書籍1点、論文5点(うち1点は2022年度に刊行予定)、学会発表6点を研究成果として発表した。

(1)アルノ・シュミットに関しては、海外発信も積極的に行い、ドイツ・ウルム市での学会発表では、シュミットの初期作品における日本語への翻訳の諸問題として、初期にすでに行われているシュミットの複合的なテキスト生成のありかたとその翻訳可能性について発表を行った。シュミットの短篇『リヴィアータン』の文体についても論文「リアリティと語りの連続性——アルノ・シュミットの短篇集『リヴィアータン』における日記体」を発表した。

(2)クレメンス・J・ゼッツについては、ゲームや動画、AIなど現在文学以外の領域で観察できる現象を、小説や演劇、講演などさまざまな形で既存の文学と結びつけてみせており、従来は主に文学の領域で観察されてきた事実と虚構のせめぎ合いが、他分野においても応用可能な問題として提示されはじめていることを作品内で示している。

(3)ゼッツに関しては、国内研究者を招きシンポジウムを一回、作家クレメンス・ゼッツも交えての国際ワークショップ(公益財団法人 国際文化交流事業財団(JICEF)、ゲーテ・インスティトゥート後援)を一回主催した。ドイツ語圏外では初となるクレメンス・ゼッツの学会会議を日本で開催することができ、海外からも反響があった。個人発表では小説『インディゴ』のニーチェとヴィトゲンシュタインからの引用と虚実に関する議論を指摘した。

(4)同じく『インディゴ』については、自動人形などで知られる不気味さについての研究が参照されていることを指摘できた。ここでも(人間かどうかの)虚実の境界にゼッツが興味を持っていることが示された。(「不気味なものカタログ クレメンス・ゼッツ『インディゴ』とE.イェンチュ「不気味なもの心理学へ」比較)

(5)ポストモダニズムとの関連を整理した。AIに言及しチャットボットに似せたという書籍『BOT 作者不在のインタビュー』に関する論文「作者のなかにいる作者」では、不在であるはずの「作者」の所在分析を通して、「作者の死」を経た現代に考えられうるあたらしい「作者」がどのように扱われているかを考察した。

(6)かけはし文学賞を受賞し、『インディゴ』を国書刊行会より翻訳出版した。これを機にゲーテ・インスティトゥート東京において作家との対談イベント(メルク社・ゲーテ・インスティトゥート東京)にも出演した。本作は日本語での初のゼッツ作品紹介となった。

(7)小説『インディゴ』ではパラテキスト(書籍における本文以外の情報)に意識的な実験が加えられていることを日本独文学会ウェブコラムで社会的に紹介したほか、他の書籍でもさまざまな形でパラテキストが実験対象になっていることをドイツ現代文学ゼミナールで発表した(「書籍のフレーミング効果を考える——クレメンス・J・ゼッツ作品のパラテキストの役割」)。現実の世界からフィクションが書かれた書籍という虚の中へと入る境界にこのパラテキストがあり、そこでの実験が意識的になされていることが判明した。さらにこの問題を探るために、論文「父親不在の父子関係——クレメンス・J・ゼッツ『息子らと惑星たち』考」ではデビュー作における創作と父子関係について分析を行った。

(8)クレメンス・ゼッツの講演「ケーフェイと文学」は、まさにこの虚実の境界に関する講演である。本作をポストモダニズムとの関連、ゼッツの各作品との関連から解きなおし、日本独文学会で学会発表を行った(「クレメンス・J・ゼッツ『ケーフェイと文学』からみるポスト真実時代の第四の壁」)。この発表をもとにした同タイトルの論文が日本独文学会学会誌に掲載予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 犬飼彩乃	4. 巻 164
2. 論文標題 クレメンス・J・ゼッツ『ケーフェイと文学』からみるポスト真実時代の第四の壁	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ドイツ文学（日本独文学会）	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 犬飼彩乃	4. 巻 518-14
2. 論文標題 父親不在の父子関係ークレメンス・J・ゼッツ『息子らと惑星たち』考	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 14-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 犬飼彩乃	4. 巻 517-14
2. 論文標題 不気味なもののカタログークレメンス・J・ゼッツ『インディゴ』とE・イエンチュ「不気味なものの心理学へ」比較	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 犬飼彩乃	4. 巻 516-14
2. 論文標題 リアリティと語りの連続性 アルノ・シュミットの短篇集『リヴィアータン』における日記体	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 39-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 犬飼彩乃	4. 巻 515-14
2. 論文標題 作者のなかにいる作者 クレメンス・J・ゼッツ『ポッター作者不在のインタビュー』におけるテキストの主体	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 113-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 犬飼彩乃
2. 発表標題 クレメンス・J・ゼッツ『インディゴ』にみる世界の限界とフィクションの可能性
3. 学会等名 オンライン国際ワークショップ「クレメンス・J・ゼッツ ポストヒューマニズムの文学」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 犬飼彩乃
2. 発表標題 書籍のフレーミング効果を考える クレメンス・J・ゼッツ作品のパラテキストの役割
3. 学会等名 第76回ドイツ現代文学ゼミナール
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 犬飼彩乃
2. 発表標題 クレメンス・J・ゼッツ『ケーフェイと文学』からみるポスト真実時代の第四の壁
3. 学会等名 日本独文学会春季研究発表会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ayano Inukai
2. 発表標題 Ein kurzer Blick auf die deutsche Literaturszene in Berlin.
3. 学会等名 Land der vielen Literaturen. Literaturbetrieb und Uebersetzung. Workshop fuer Uebersetzer aus dem Deutschen ins Japanische. Goethe-Institut Tokyo. (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayano Inukai
2. 発表標題 Tiertaezner auf dem Seil. Der Roman "Indigo" aus posthumanistischer Perspektive.
3. 学会等名 Clemens J. Setz: Literatur des Posthumanismus, Tokyo Metropolitan University
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayano Inukai
2. 発表標題 Gegen die Konventionen des Textes. Experimentelle Uebersetzungen von Sprachexperimenten im Rahmen des Projekts Arno Schmidt ins Japanische.
3. 学会等名 33. Jahrestagung der Gesellschaft der Arno-Schmidt-Leser (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 クレメンス・J・ゼッツ、犬飼彩乃	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 568
3. 書名 インディゴ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 オンライン国際ワークショップ クレメンス・J・ゼッツ ポストヒューマニズムの文学	開催年 2021年～2021年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------